英語教育と文学的教材［11］†

－学習指導要領と文学的教材－

小澤　浩美＊・幡山　秀明＊＊
栃木県立茂木高等学校＊
宇都宮大学教育学部＊＊

学習指導要領は教育政策を体現し、教科書や入試問題の内容に影響を与える。現行の学習指導要領のもとに、外国語科の指導の重点は音声重視に偏り、教材としては文学的な文章よりも説明的文章や場面に応じた「定型会話」が多く用いられてきた。しかし、多くの教師は文学的教材の価値とその存在意義を認めている。生涯学習の基礎を築く時期には文学的教材を含む様々な種類の教材に触れさせ、バランスのとれた英語力を身につけさせたい。現在執筆が進んでいる新指導要領に準拠した教科書には、このような考えのもとバランスの良い教材の選定が望まれる。

キーワード:　英語教育　文学的教材　入学試験　教科書　学習指導要領

１．はじめに

1980 年代の高校英語教科書における文学教材を調査・研究した山内(1993)によると、当時は数多くの文学的教材が採用されていたことがわかる。入試問題にもよく採用されたMaughamなどは登場回数１１回の定番であった。現在の状況から考えると隔世の感すらあるが、文学的教材が言語教育の場から全く消えてしまうことは考えられない。

本稿では入学試験・学習指導要領・教科書教材・教員の意識調査という側面から英語教育における文学的教材の現状を明らかにし検証することを通して、中学校・高校の授業における文学的教材のあり方への示唆を試みたい。

２．入学試験の中の文学的教材

学校での英語教育を考える場合、評価としてのテストとの関係を考えなければならない。学習したことがどれくらい定着しているかを測るのであるから、テストは学習内容との整合性が図られていることが必要である。校内のテストは担当した教員が作成することが多いので整合性は図りやすい。授業中に文学的教材を扱えば、問題として出題されることになろうが、高校入試問題や大学入試センター試験（以下、センター試験）ではどうだろうか。

公立高校の入学試験は中学校で学習した基礎基本が理解できているかをみるために、また大学入試センター試験は高校での基礎的な学習の達成度をみるために、それぞれの学習指導要領に準拠して出題されている。学習指導要領には中学校または高校の３年間に身につけるべき英語力が示されており、これに則して出題された試験問題は、生徒が入学までに身につけておくべき力を体現しているはずである。

ところで中学校・高校で現在使われている学習指導要領（以下、現指導要領）には「文学」という文言は使われていない。中学校の現指導要領では文学の一形態と考えられる「物語」という文言が、「３指導計画の作成と内容の取扱い」の２番目の項目の中に題材の一例として述べられているのみである。これは 2008 年に告示された学習指導要領（以下、新指導要領）でも同じ扱いとなっている。また、高校の現指導要領では、リーディングの科目内容の一つとして物語を読むことがあげられ、題材の一例としても物語があげられている。新指導要領でも、コミュニケーション英語の科目内容として物語を扱うことが述べられている。しかし、現指導要領に題材の形式として言及されている「説明文、対話文、物語、劇、詩、手紙など」という文言は、新指導要領では削除されている。ここでは「物語」を文学的教

† Hiromi OZAWA*, Hideaki HATAYAMA**: English Education & Literature as Teaching Materials [11]
＊ Motegi High School,Tochigi
＊＊ Faculty of Education, Utsunomiya University

材の代表例として、入学試験においてどのような扱いになっているかを見てみたい。

まず、2009 年度入学者用の問題を収めた『2010 年受験用全国高校入試問題正解』(2009)を見てみよう。公立の高校の中には都道府県内統一の問題ではなく独自の問題を課す学校があり、それらは難易度がやや高くなっている。今回は、このような独自の問題は考慮に入れず、都道府県内共通で使用している問題に物語文が出題されているかを見てみた。ざっと目を通して感じるのは、ダイアログ形式の問題文が非常に多いことである。受験者にとってはダイアログ形式と言っても「読んで」理解することを課されているに他ならず、中には戯曲形式の物語ともとれる問題もあるが、ここではナラティブ形式の物語のみを対象として考えた。４７都道府県中、ストーリー性のある文章を問題文として出しているのは１６都県であった。ダイアログ形式ではないものとしては、物語以外に説明的文章や手紙文、スピーチ原稿などの形式が見られた。この１６という数字をどうとらえるかは解釈が分かれるところではあるが、逆に３１の道府県が物語を問題文として採用していないと考えると、「英語で書かれた物語を読む」ということは、中学校段階で身につけるべき力としてはさほど重要視されていないのではないかと受け取れる。

次に、センター試験の 2005 年度から 2010 年度までの長文読解問題文の題材を見てみよう。センター試験は 2006 年度にリスニング問題が導入されて話題になった。しかし、全問マークシート方式という形式上の特徴から読解問題が多くの割合を占めており、英文の量も多い。例年第６問が長文読解問題になっている。2005 年度から 2007 年度まで物語文の形式で出題されていたが、2008 年度に論説文へと方針が転換され、2010 年度まで連続で論説文が出題されている。将来、物語文への回帰も考えられないわけではないが、高校生の読解の力を見るのには物語文を読み取る力よりも、論説文を読み取る力の方を重視する傾向がでてきていると考えられるだろう。このように入学試験問題の傾向からは、文学的教材を重視する傾向は見られない。

３．学習指導要領と文学的教材の変化

ここでは、学習指導要領と文学的教材の関連をみてみよう。中学校・高校ともに外国語科の指導目標として「コミュニケーション能力の育成」が掲げられて久しい。中学校版の現指導要領では、「実践的コミュニケーション能力の育成」という文言が大いに議論の対象となった。特に「聞くことや話すことなどの」というただし書きがついたことで、外国語科におけるコミュニケーション能力のとらえかたが音声面に偏ってしまった点は否めない。このことは、検定教科書の題材形式にも影響を与えた。「電話での応答」「買い物」「道案内」などが「言語の使用場面の例」として例示されたことで、特定の場面に焦点をあてたダイアログ形式のページが増えた。また、聞くことの活動に特化し、ほとんど英文が載っていないページも登場した。さらに、中学校で学習する単語の数は日常生活にかかわる基本的な語を含む 900 語程度までとされ、これまでの学習指導要領に規定された語数のうちで最も少ない。教科書１ページあたりの文の数も減少し、内容の乏しいおもしろみにかけるものになった。

江利川(2008)は「文学教材にとって学習指導要領は『いじめっ子』のような存在だ」(p. 81)と述べている。彼は学習指導要領の変遷とともに文学教材の扱いがどのように変化してきたかを検証し、具体例としてかつての中学校用リーダーの定番教材 *Robinson Crusoe* の記述が 1930 年から 1981 年の間にどのように変わってきたかを明らかにした。それによれば、学習指導要領によって言語材料の厳しい制約を受け、教育的配慮から“savage”を “my new friend”に書き換えるなどの変更が加えられたため、原作のイメージは一変してしまったという(p. 82)。江利川は文学の持つ文体や言語的おもしろさがそぎ落とされたこの状態を「鮮魚は乾からびた干物にされ、おいしくないからと消費者場離れが起きた」(p.82)と表現する。学習教材の選定においては、生徒の発達段階を考慮しなければならないから、いくらすばらしい文学作品でも教科書教材とするにはどうしても改作をほどこすことが必要になる。しかし、度が過ぎれば、何のための文学的教材なのか疑問に感じることにも繋がるだろう。

現行の 2006 年度版の検定教科書にも様々な文学的教材が採用されているが、一例として *NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 3* に掲載の *The Whale Rider* の簡略版を見てみよう。原作であるマオリの作家 Witti Ihimaera の同名の小説は、ペーパーバックで 150 ページほどの作品であるが、現指

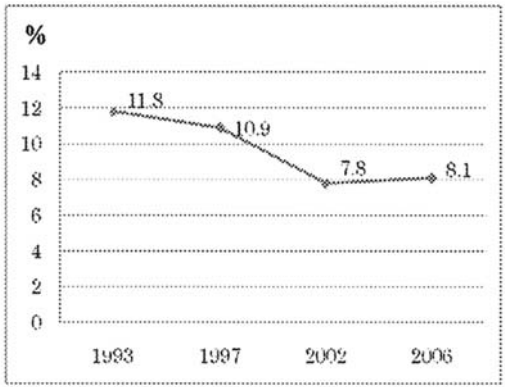
導要領に準拠した中学校３年生用の教科書教材としては、わずか４ページに縮小せざるを得なかったようである（しかもページの下半分は映画のスチール写真が占めている）。「人間の成長」「家族の愛と葛藤」「多文化社会」「伝統の継承」「性差別」などの豊かなテーマを含んだ作品であるが、教科書教材だけではその深みを伝えることはとうていできない。これがまさに江利川が言う「乾からびた干物」であろう。この教科書教材を、英文和訳中心に学習した生徒の一人が授業後の感想として次のように述べている。

「原作は内容の濃いストーリィなわけだから、中学３年までに学んだ文法のみで、しかも４ページでまとめようとするのは無謀だし、いささか投げやりな感じがする。多少難しくなっても、もっと詳しく物語を追っていきたいと思った。」（原文のまま）

４ページしかない簡略版でも読むのに苦労する中学生がいることも事実だが、この生徒の感想は極めて妥当なものである。少しでも原作の豊かな文学性を伝え、物語の展開のおもしろさを味わわせるためには、極端に簡略化された教科書教材をなぞるだけではその価値が生かせない。映像や原作を利用したり、ストーリーのリテリング活動を取り入れたりするなど、文学的教材の良さを生かした授業の組み立てを考えたい。

ここで、中学校の英語教科書において、文学的教材のページ数の割合がどのように変化してきたかを見てみよう。実際のところ、旧指導要領に準拠した1997年度版まで、教科書全ページ中に占める文学的教材の割合に顕著な減少は見られない。岡本(1992)は、学習指導要領の改訂に合わせて 1947 年から1992年までを６期に分類し、その各期で使用されてきた合計219冊の中学校英語教科書を調査した。その結果岡本は、文学作品のページ数の割合は常に教科書全ページの１割前後を保ち、全体に占める割合としては決して少なくなってきているわけではないと指摘している。この１割という数字を十分と考えるかどうかは意見が分かれるところだが、岡本は初歩の段階である中学校で、様々な生徒を対象としている英語教科書の中に文学作品が存在するという事実を重要視している。文学作品は学校教育の目指す人格形成や人間的成長という目的に沿うものであるとし、将来専門的な学習をしないであろう生徒が多くいるからこそ、英語学習の初歩の段階で、人生を豊かにする発展性のある教材として文学作品の役割を大切にするべきだと述べているのである。

筆者は岡本の手法を踏襲して 1993、1997、2002 及び 2006 年度版の中学校英語教科書について、文学的教材のページ数の割合を調査した。図１はその結果を示している。



（図１）文学作品の割合の変遷

1993、1997 年度版は旧指導要領に、2002、2006 年度版は現指導要領に準拠した教科書である。調査の結果、現指導要領に準拠した教科書では文学作品の割合は減少していることがわかった。現指導要領に示された方針が教材の選定に影響を与えていることは明らかである。

『中学校学習指導要領（平成１０年１２月）解説―外国語編―』(1999)では、教科の目標の三つの柱のうち、「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことを「最重要項目」とすると明記している(p. 7)。教科書における文学的教材のあり方は、教科の目標が「コミュニケーション能力の育成」にシフトしていくにつれて変化してきた。多くの場合、文学的教材は復習用の読み物として教科書の巻末などに配置され、軽く扱われる傾向にある。実際に「重要な文法事項を含む課に多くの時間をかけるために、文学的教材を扱った復習用読み物の課はできるだけ簡単にすませたい」という話は教員の間でも聞くことがある。また、筆者は生徒の一人に「巻末の物語教材は授業で扱うつもりか」と聞かれたことがある。この生徒は、「もし学校で扱うのであれば塾でも抜かさずに扱うから聞いてくるように」と塾の講師に言われたとのことであった。このようなことからも、文学的教材は軽く扱ってもよいものとして過小評価されている傾向が

読み取れる。高校や大学の入学試験における文学的教材の取扱いにも影響が出ていることは、なんら不思議なことではない。

前述の江利川は「企業のグローバル戦略を教室に持ち込み、実利主義を英語科教育の原理にすえていいのだろうか」(p. 85)と指摘している。さらに、教育の目的である「人格の完成」のために「読んで考えさせ、味わい感動させる英語教育がもっと必要なのではないだろうか」(p. 85)と述べている。学習指導要領は、過去を検証し未来を見据えた上で教育の方向性を定めるものであり、教室ではこれにのっとって授業を行うことで生徒を育てていく。『中学校学習指導要領解説外国語編』(2008)では、新指導要領における外国語科の目標の最重要事項を「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことであるとし、音声中心を掲げた現指導要領から、４技能の総合的な育成への変更を改善の基本方針としている。指導要領解説ではこの方針転換の理由を、小学校に外国語活動が導入されたことによるものとしている。つまり、中学校では小学校で育まれた音声面を中心としたコミュニケーション能力の素地の上に、４技能をバランス良く育成することが必要だというのである。いずれにせよ、これは現指導要領のもとで起こった「音声による」コミュニケーション能力育成への偏りのまずさを是正する方針転換である。

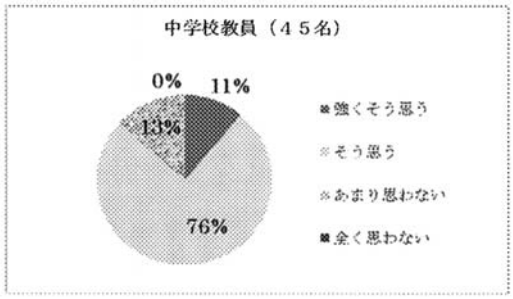
めまぐるしく変化し、グローバル化が進む現代社会において「生き残り」をかけるために外国語を学習することは、手段の一つとして非難されることではない。しかし、外国語の学習には様々な側面がある。特に中学校・高校のように、生涯にわたる学習の基礎を築く場ではバランスを欠いた指導はなされるべきではない。「音声偏重」から「４技能の総合的育成」への揺り戻しとともに、文学的教材軽視の傾向にも歯止めがかかることを望む。

４．文学的教材に対する教師の視点

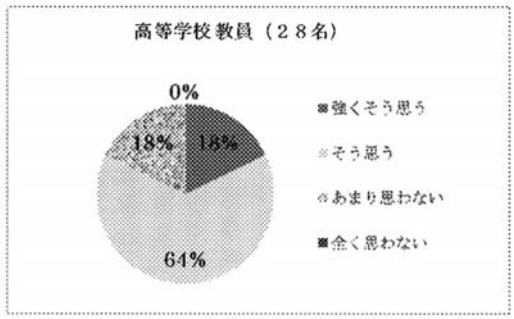
ここでは、実際に生徒と関わり授業を組み立てていく立場にある教員が、文学的教材に対してどのような視点をもっているかを見ていきたい。検定教科書は主たる教材として使用が義務づけられており、全ての生徒が手にするものである。しかし、同じ教材に対しても教員一人一人のアプローチのしかたは違っており、生徒の教材のとらえ方にも影響を及ぼす。

筆者は中学校・高校の英語教員にアンケート調査を行い、中学校45名、高校28名、合計73名から回答を得た。以下の図2および3にその結果を示す。

Q：中学校・高等学校の英語の授業で「文学的教材」を扱うことは大切だと思いますか。
（回答は、強くそう思う・そう思う・あまり思わない・全く思わないから選択し、理由を自由記述で記入。）



（図２）文学的教材に対する中学校教員の視点



（図３）文学的教材に対する高校教員の視点

このアンケート結果は、８割を超える英語教員が「文学的教材」に対して肯定的な意見をもっていることを示している。以下に、自由記述で書かれた理由の中から主なものをあげる。

➢　「強くそう思う」「そう思う」理由

［中学校・高校］

・文学は生徒の記憶に残りやすい。
・読書離れが進む生徒にとって、英語の授業で文学を取り入れるのは良い経験になる。
・文学を読んで楽しむのは大切である。
・様々なスタイルの教材を読ませるのは大切。
・歴史的な背景を知ることができる。
・他教科に関連する知識を得ることができる。

・生徒は文学教材に興味をもっている。
・感受性に欠ける生徒もいる。感動的で共感をよぶ文学は必要である。

［中学校］
・戯曲形式の教材の言葉のやりとりは興味深いようで、生徒は自然にセリフをおぼえてしまう。
・「聞く」「話す」だけでは十分ではない。「読む」ことで学習の幅が広がる。
・生徒は英語で物語を読む喜びを味わう。中には原作で読んでみようとする生徒もいる。
・文学には強いメッセージがある。

［高校］
・文学を読むことによって、人間の行動の因果関係や社会的な反応を学ぶことは必要である。
・文学作品だと、生徒は進んで予習をしてくる。
・詩的なリズムの美しさは言葉への興味をかきたてる。
・文学テクストを読むことは大学入試に必要。

➢ 「あまり思わない」理由

［中学校］
・中学レベルで文学を扱うのは難しい。
・教科書の英文は簡略化されすぎていて、文学とは言い難い。

［高校］
・文学は生徒の興味が分かれる。
・文学は大学に入ってからでよい。
・文学教材を扱う時間がない。

文学的教材は、現在の日本の英語教育において中心的地位を占めているとは言えない。それでもこの調査の示す範囲では、多くの中学校・高校の英語科教員が文学的教材の価値を認めていることがわかる。これは、教員個人の経験や教室での生徒の反応を手応えとして感じてのことであろう。文学作品の中でも特にストーリー性のあるものは、読む楽しみを与えてくれる優れた教材となる。物語の続きが知りたくて英語で書かれた文章を自ら読もうとしたり、教科書を超えてその原作にまで興味の幅が広がったりすることこそ、「読むこと」のコミュニケーション能力を身につけることにつながっていく原体験になるのではないだろうか。

5．コミュニケーション能力育成と文学的教材

授業で文学的教材を扱うことに関しては、様々な研究者が以下のような長所があると述べている。

- 意味あるコンテクストの提供
  (McKay 1986, Collie & Slater 1987, Ghosn 2002, Brown & Hirata 2007)
- 学習の動機づけ
  (McKay 1986, Lazar 1993, 中村 2003, 白須 2004, Duff & Maley2007)
- 文化的な豊かさの提供
  (Collie & Slater 1987, Lazar 1993, 中村 2003, 白須 2004, Duff & Maley 2007)
- 全人教育に資する
  (Lazar 1993, 岡本 1993, Ghosn 2002, 中村 2003, 白須 2004)

この中から特に「意味あるコンテクストの提供」について取り上げてみよう。これは現指導要領に明記された「言語活動の取扱い」に関する重要な配慮事項と密接な関連があり、中学校・高校ともに新指導要領にも引き継がれている。その重要な配慮事項とはコミュニケーション能力の育成を図るために「言語の使用場面や言語の働き」を明らかにし、具体的な文脈の中で指導することが重要だということである。Ghosn(2002)は、外国語の授業に文学を使用する４つの理由をあげ、その中の一つとして“It [Literature] presents natural language, language at its finest, and can thus foster vocabulary development in context” (p. 173)と述べ、自然な言語を提供する文学教材は、文脈の中で語彙を身につけることができるとする。また、Collie & Slater(1987)は、生徒に読ませるテクストを教師が賢明に選択することの大切さを述べた上で、“literature provides a rich context in which individual lexical or syntactical items are made more memorable”と主張し、文学教材は文脈がある中で語彙や構文を提供することができ、生徒の記憶の把持に貢献することを主張している。

このようなことからも、文学は現在の中学校・高校での英語教育の中でもっとていねいに扱われてもよい教材だと言えるだろう。

6．おわりに

授業で文学的教材を扱うことは、過去に比べて難しくなっている。学習指導要領とそれに準拠した教科書や入学試験に対応しようとすれば、どうしても

文学的教材にかける時間は少なくなるだろう。文学的教材は論説文などと違ってパラグラフ構成がしっかりしているものばかりではない。人間の心と人間同士の関わりがストーリー展開に影響するので、説明的文章と違って不条理な面もあるし、文化的な背景が違えば内容理解に時間がかかることもある。しかし、文学的教材には説明的文章にはない彩りがあり、読む者を惹きつける魅力がある。

中学校版新指導要領では指導する語の総数が「900 語程度まで」から「1,200 語程度」になり、指導要領解説では増加の理由を「より豊かな表現を可能にし、コミュニケーションを内容的にもより充実できるようにするためには語数の増加が必要」としている。高校でも指導する語数を充実するとして、すべて履修した場合、高校で 1,800 語、中高で 3,000 語を指導することになる。新指導要領の施行を控えて、教科書の執筆も進んでいるところである。ますますグローバル化が進む今後の世界に生きる生徒には、かえって説明的文章や定型会話などに偏らず、人間の営みを表現した文学的教材を与えることが必要である。新版の教科書には、そのようなバランスの良い教材の選定が望まれる。

参考文献

江利川春雄(2008)『日本人は英語をどう学んできたか―英語教育の社会文化史』東京:研究社

岡本有里(1992)「中学校の英語教科書にみられる文学作品の変遷」『神戸大学大学院英語教育研究会 KELT』8,62-76

岡本有里(1993)「中学校の英語科における文学教材」『青木庸效教授還暦記念論文集 英語科授業学の諸相』130-141

株式会社旺文社(編)(2009a)『2010年受験用センター試験過去問予備校講師はこう解く!①英語(筆記)』東京:株式会社旺文社

株式会社旺文社(編)(2009b)『2010年受験用全国高校入試問題正解英語』東京:株式会社旺文社

白須康子(2004)「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『人文研究:神奈川大学人文学会誌』154, 83-111

高橋貞夫他(2006)*NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 3* 東京:三省堂

中村愛人(2003)「英語教育における文化教材としての文学作品の意義」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』52, 115-119

文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説外国語編』2009/11/9 検索 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm

文部科学省(2009a)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編(第6版)』東京:開隆堂出版株式会社

文部科学省(2009b)『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』2010/03/21 検索 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf

文部省(1999)『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説―外国語編―』東京:東京書籍

山内啓子(1993)「高等学校の英語教科書に現れた文学教材」『青木庸效教授還暦記念論文集 英語科授業学の諸相』142-154

Brown, T., & Hirata, E. (2007). Are you sitting comfortably? The role of storybooks in primary English education. *Bulletin of Faculty of Education, Nagasaki University: Curriculum and Teaching, 47,* 119-127.

Collie, J., & Slater, S. (1987). *Literature in the language classroom.* Cambridge: Cambridge University Press.

Duff, A., & Maley, A. (2007). *Literature* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.

Ghosn, I. K. (2002). Four good reasons to use literature in primary school ELT, *ELT Journal 56,* 172-79

Ihimaera, W. (2003). *The whale rider.* 1987. Auckland: Reed Books; Orland: Harcourt, Inc.

Lazar, G. (1993). *Literature and language teaching.* Cambridge: Cambridge University Press.

McKay, S. (1986). Literature in the ESL classroom. In C. J. Brumfit and R. A. Carter (Eds.), *Literature and language teaching* (pp. 191-198). Oxford: Oxford University Press.

(本稿の実質的著者は小澤浩美教諭です)